

高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会報
編集人 田村佐起三

〒六〇四一八〇〇一
京都市中京区木屋町通三条上ル
電話 (〇七五) 二二二二・一八二八
弊NPOは「憲法を改正、経済力と軍事力の両面で健全な国体を支える国家」を求めます。

《水炊き「萬次郎」さん》

「萬治郎」さんは京阪本線「祇園四条駅」から徒歩5分、辰巳稲荷の北向にある水炊きのお店です。十月から四月の間のみ営業しており、一日五組限定なので、事前に予約が必要です。メニューは「鶏の水炊きのセット」のみ。肝とずりの甘草煮、鶏スープ、鶏水炊き、雑炊、漬物、デザートが付きます。肝の臭みがいつさいない甘草煮、塩加減と生姜水で作られる鶏スープは絶品。豆腐と湯葉と白菜がはいった鶏水炊きのメに雑炊をいただきます。すべて店員さんが作ってくれるので安心です。京都にお越しの際は、是非予約を入れておいしい水炊きをご賞味ください。

五月から九月まで、大将や眞輝子女将に遊んで戴きます。お食事や旅行にご一緒します。

NHK千年蔵「勝林院」大原寺声明道場

京都の「蔵」―それは千年の歴史を伝えるタイムカプセル。秘宝が語る「真実」の声をかたむけると、誰も知らない物語がよみがえる。舞台は大原・勝林院、平安時代に創建された仏教音楽「声明」の聖地だが、今はその面影もない困窮ぶりだ。番組では全国の専門家とともに「蔵の中身の全部出し調査」を進行。発掘された1853点の文化財から織田信長から藤原道長まで歴史的なビックネームとの知られざるつながりを追う。

私と勝林院との出会いは昭和33年中学の担任天納傳中先生が輪番住職であったから、また、先生が叡山学院の学監に就任、声明研究の第一人者を私が認知、昭和62年「天台声明を聴く会」を第一回から先生と勝林院本堂にて開催、来年には35年目を迎えます。

私の本棚 おすすめの一冊 粉川 剛

《荒廃する日本/インフラ再生研究会著》
日本のインフラは大丈夫か？②

1980年代の米国では20年代から増えた道路インフラの維持管理に十分な予算が投入されず老朽化した橋の崩壊など多くの重大な事故を招いた。「荒廃するアメリカ」と呼ばれ多くの人命が失われ多額の経済損失により米国の国際競争力は低下した。トランプ大統領は「偉大なアメリカ」の再建のためにITも含め巨額のインフラ投資を行うと表明した。その米国と同じインフラ危機が今の日本を襲う。財政再建の為に「辻褄合わせの予算」がインフラ整備予算の減額を招き国際的に見れば我が国のインフラはもはや2、3流国並みのレベルでしかない。国民の生命・財産を守り生産性を高め経済を活性化させるには公共工事無駄・バラマキでは無く公共工事社会基盤整備の意識を持たなければならぬ。国民は公共投資によって投下した費用を遥かに上回る安全と利益を手に入れることが出来る。

土口哲光和尚の説法

《みんな違ってみんないい》

日ごと夜ごとに秋は深まり、今年の暦が残り少なくなる。恵まれて、滋賀県栗東市東方山の山裾にある真言宗の古刹・安養寺で初秋のひとつときを過ごす。千古の境内から小鳥がさえずる。時間がたつと同じ小鳥でなく、異なった幾種類の声であることに気づく。人間であってもそれぞれ個性をもつ。長所、短所の十人十色で、価値観も異なる。「医学や薬学の心得のある人が、道ばたにはえている草を見れば、なんでもないとと思うような雑草でも、なにかの薬となる草だとわかる。宝石の目ききできる人には、石ころの中にも、宝石の原石を見いだすことができる」と、弘法大師の言葉どおり、現実の社会は多様である。包容力を発揮し「みんな違ってみんないい」を通りたい。

季節の家庭料理 田村 真紀

《十一月 ドライトマト入りケーク・サレ》

《作り方・四人分》

薄力粉百グラム・ベーキングパウダー小匙一・卵二個・粉チーズ三十グラム・オリーブオイル大匙三半・ドライトマト十グラム(熱湯で戻して粗く刻む)・ベーコン細切り二十グラム・キャベツ千切り五十グラム・玉葱みじん切五十グラム・油適量
薄力粉とベーキングパウダーは合わせてふるっておく。卵をほぐし、オリーブオイルを少しずつ混ぜ合わせ、粉チーズ、粉類を入れさつくり混ぜる。フライパンにベーコンを入れじっくり炒め野菜とドライトマトも合わせて軽く炒めて冷ます。全部の材料を合わせ内側に油を塗ったパウンド型に入れ百八十度に温めたオーブンで約三十分焼く。

つれづれの記 山崎 辰巳

《これからの時代に生かしたい》

「何か変わった新しいことある?」。これは平和な時代に人々の会話で交わされる言葉だったが、昨今は日替わりメニューのように次々とメディアから届いた情報や話題は「変わったこと」のオンパレードである。
新型コロナウイルスが引き鉄となり、感染拡大による緊急事態、医療現場の混乱、東京五輪延期の決定、自粛要請に伴う企業の倒産、失業者の急増、三密やテレワーク、ソーシャルディスタンスなどの新語まじりの波紋がじわじわと社会経済、文化・スポーツ、教育現場や家計に及んだ。加えて酷暑と風水害に翻弄され、多くの著名人の死を悼み、国政の要である総理の交替劇にも立ち会った。
僅かの期間に遭遇し耳目に刻んだ出来事やキーワードを、決して無駄にせず教訓とし、次の新しい日常に生かしたいものである。